

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 支援 - 23

|   |   |
|---|---|
| 学校名・団体名   | 筑北村立聖南中学校   |
| HPアドレス  | <a href="http://chikuhoku-edu.jp/jounior-seinan/">http://chikuhoku-edu.jp/jounior-seinan/</a> |
| コース   | 学校支援  |
| 活動・研究<br>テーマ  | 被災地訪問、復興ボランティアから学ぶ  |
| <p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・「被災地訪問」を通して、何ができるか考え行動に移すことで、少しでも被災地の方々を励まし元気づける。</li><li>・「被災地訪問」を通して、被災地の方々の思いや生き方に触れることで、自然への畏敬と命、家族、ふるさとの尊さを学ぶ。</li><li>・被災地の復興に向けて、自分ができるところを考え、実践していこうとする態度を養う。</li></ul> |   |

## <活動・研究報告>

平成29年度 「被災地訪問」  
期 日 9月9日(土)～10日(日)  
参加人数 生徒48名(吹奏楽部11名 ボランティアチーム18名 男子バスケット部 11名  
女子バレー部 8名)  
保護者12名 きささげ応援団6名 職員8名 計74名  
訪問先 宮城県南三陸町(戸倉地区・志津川地区・歌津地区)  
現地協力者 後藤一磨さん(南三陸町戸倉仮設住宅在住、語り部ガイド、復興町づくり推進委員)他

### 1 活動内容

(1) 6年目の、宮城県南三陸町への「被災地訪問」に向けて

○「元気を届ける」ことを目的に、生徒が自主的に以下の準備を進めた。

- ①本年度の「被災地訪問」はどんな訪問にするか、全校で意見を出し合い互いの考えを共有した。
- ②「被災地訪問新聞」の発行。(「被災地訪問」への思いや準備状況の紹介等、全校生徒・保護者へ取り組み内容を発信し、被災地訪問への意識を高めた。)
- ③南三陸町の高産物販売。(村の福祉祭りの会場で、南三陸町より取り寄せた高産物を販売し、売上金19,258円を「被災地訪問」の際、南三陸町に支援金として届けた。)
- ④郷土の筑北米を使った「おかき作り」「やしょうま作り」。(地域の方と一緒に、「おかき作り」「やしょうま作り」を行い、「被災地訪問」での交流時、被災地の方々に味わっていただいた。)
- ⑤復興を願い、全校で取り組んだ「絆君(フェルトマスコット)作り」「芝刈り君(園芸マスコット)作り」(一人一人メッセージを添えて、訪問先の方々に届けた。)
- ⑥信州型コミュニティスクール「きささげ応援団」(生徒の活動を支援する、保護者地域の方々への協力の要請。(各チームが現地で活動する際、大人の力が必要なことに関して、生徒から説明と協力の依頼を行った。))

(2) 宮城県南三陸町への「被災地訪問」

○各チームごとにわかれ、被災地の方々と交流を行った。

<1日目>

吹奏楽部—南三陸町戸倉災害公営住宅にて、1回目の訪問演奏。その後、公営住宅の方々と交流。志津川地区の「さんさん商店街」にて2回目の訪問演奏。

ボランティアチーム—南三陸町戸倉災害公営住宅にて、3つの班に分かれて交流。

- ・「おかき」と筑北村の郷土食「やしょうま」を振る舞う。
- ・吹奏楽部の演奏を聴きにきてくださった方へハンドマッサージを実施。
- ・現地の子どもたちと、遊びを通して交流。

男子バスケット部、女子バレー部—志津川中学校の同部と交流試合と、保護者を交えた交流会を行う。

※全員で、後藤一磨さんの案内の元、「防災対策庁舎跡」「高野会館」を見学。

<2日目>

吹奏楽部—宿泊先「高倉荘」さん(歌津地区)近くの公民館にて、3回目の訪問演奏。

ボランティアチーム、女子バレー部—3つの班に分かれて交流活動。

※歌津地区公民館にて、前日と同内容の交流活動。

男子バスケット部—宿泊先「清観荘」さんのご主人(漁師)から震災当時のお話を聴く。その後、奉仕作業(わかめ養殖用ロープの手入れ)。

(3) 「被災地訪問報告会」の実施

期 日 11月30日(木)

対 象 全校、保護者地域の方

※出席者全員による「花は咲く」の合唱。NHKの「花は咲く」に応募。

### 2 成果と今後に向けて

6年目となった、今回の「被災地訪問」は全校生徒の約80%が参加した。自主参加とはいえ、被災地に「元気を届ける」活動は、本校にとって中心となる活動の一つとして定着してきたことがわかる。また、毎年同じ地域を訪問してきたことで、生徒たちは被災地の方々と「心の交流」を深めてきた。この心のつながりが、生徒たちの原動力となり、各場面で自主的な姿となって表れた。

6年経った被災地は復興が進み、被災者の方々の生活も変わってきている。訪問し続けてきたことで、生徒たちはその変化を肌で感じてきた。震災直後の悲しみや苦しみから、人々はどのように過ごし今を生きているか、それを目の当たりにしたことは、「人間の尊厳」を学ぶ経験にもなった。

「報告会」では、被災地での活動報告に加え、この6年間の経験や学びを自分たちの生活にどう活かしていくか、全校生徒で意見を交換した。生徒たちからは、次のような主旨の発言があった。

- ・震災にあった人たちは、苦しい思いをした人たちだけど、それを乗り越え笑顔でいる。私も辛いことがあっても笑顔でいたい。
- ・今の生活に感謝して、家族や友達とたくさん話をしたい。
- ・諦めずに前を向いて、何事にも挑戦していきたい。
- ・東北の人たちに負けないように、勉強や部活を頑張る。
- ・今幸せであることを忘れず、一日一日を大切に過ごす。
- ・災害は自分にも起こることだと考え、被災地での出来事を他人事と思わないようにする。
- ・災害対策をして、自分の命は自分で守れるようにする。
- ・自分が行く（行動する）ことで、変わることがある。
- ・困っている人や、助けを求めている人を放っておかず、まず話を聞いてあげる。
- ・1人の力は小さいが、たくさんの人が集まれば大きな力になる。その力で、困難な状況を変えていきたい。
- ・この筑北村に限らず、家族のように接してくれる方々が、被災地にいることを忘れず、自分にできることを精一杯やっていきたい。
- ・被災地やそこで暮らしている人たちのことを忘れず、自分が見たことや聞いたことを、多くの人に伝えていく。
- ・互いに支え合うことの大切さを大事にしたい。被災地の人たちや地域の人たちとのつながりを大事にしたい。

本校が「被災地訪問」を通して、学んでほしいと願った「自然への畏敬の念を深める姿」「多くのつながりに気づき感謝する姿」「ふるさとに心を寄せる姿」「実践力と発信力を高め、自己実現していく姿」、これら以上に、生徒たちはたくさんのことを被災地から感じ、自分自身の中で熟考し昇華させていった。今後、それらを各自の生活の中でどう広げていくか、また被災地の方の「忘れないで」という思いにどう応えていくかが、「被災地訪問」の本当の価値であると思う。

生徒たちのふるさと筑北村は、子どもたちの活躍や成長に大いに期待し、そのための協力を惜しまない。きささげ応援団をはじめ地域と連係をとりながら、生徒を中心にこれからも被災地に「元気を届ける」活動を行いたい。

